

=====
CONTENTS

- 巻頭言
- 第65回全国学術大会のご案内
- 全国理事会のお知らせ
- 連載 在外研究記 第2回
- 事務報告
 - 2015-16年第2回常任理事会議事録
- 地方部会報告
 - 2015年度関西部会大会
 - 2015年度西日本部会研究集会
 - 東海部会第5回研究集会
- 日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

=====

■ 巻頭言 海外の中国研究について考える

巖 善平（同志社大学）

中国生まれだが研究者としての人生はすべて日本で過ごした者として、自分自身の中国研究も含め、海外在住の中国人による中国研究、そして、日本の中国研究について日頃感じていることを述べたい。

1. 海外在住の中国人による中国研究

1980年代以降、海外留学を終えた多くの中国人は現地の大学等で職を得、中国の政治、経済、社会等に関する教育研究に従事し、今や各国の関連学会で一定の存在感を示し、中国との交流で重要な役割を果たしている。日本でもこのような現象が見られる。1990年代以降、国際化、グローバル化が進み、経済が急成長した中国と世界各国の相互依存関係が強まったことが背景にある。

国外にいながら中国を研究対象とする中国人研究者が各分野に数多くいるということは、中国に対する国際社会の関心が高く、中国情報に対する各方面のニーズが多いからにはほかならないが、海外在住の中国人研究者が急増し、自分たちだけでもコミュニティーを形成できていることも重要な理由として挙げられよう。例えば、アメリカ、イギリス、オーストラリアなどで中国人研究者による中国経済学会が作られ、定期的な全国大会や中国国内の関連学会との国際カンファレンスが開催され、英字ジャーナルも発行されている。彼らは互いに研究成果を引用したり、現地の学界とも英語で交流するアカデミック空間を作り上げたのである。

一時、中国国内に「海外で中国研究をする者はみっともない二流以下だ。外国人に中国事情

を紹介するだけでは研究にはならない」という意見が多かった。しかし実際に、海外在住の中国人による中国研究は、外国人の目線で行われる地域研究としての中国研究と異なる一面も併せ持つ。中国での生活体験や言葉では言い表せない現場感覚をもって、外国人にも理解してもらえらる分析方法と文章表現で研究成果をまとめ、SSCI (Social Sciences Citation Index) または SCI (Science Citation Index) の対象ジャーナルで論文を発表する。これはいまや、欧米で活躍する中国人研究者にみられる普通の光景であり、海外在住の中国人による中国研究が単なる中国事情の紹介だけではないことも、中国国内で広く知られるようになってきている。中国政府は早くからそれに目を付け、海外に暮らす中国人研究者に「把中国的故事講好」という役目を果たすよう呼びかけている。彼らは、英語を自由に操ることができ、それぞれの専門領域で研究実績を持ち、外国人が受け入れやすい表現で中国のことを世界に発信できる、と中国政府は見ているからであろう。

日本在住の中国人研究者はどうであろうか。日本の各大学で中国関連の教育研究に従事する中国人研究者は相当の数に上っており、それぞれの研究分野で優れた業績を上げ、日本の主流社会でも一定の役割を果たしている。しかし、下記の三つの理由で中国研究を志す日本在住の中国人研究者の多くが悩ましい状況に置かれていることも事実であろう。①教育研究活動が主に日本語で行われるため、その存在が欧米在住の中国人研究者にはほとんど認知されずにいる。②中国経済の急成長と共に勢いがついた日本留学からの「海亀派」との間に逆の落差が形成され、目下の日中関係も影響して日本在住の中国人研究者の多くがかつての仲間達に重要視されなくなっている。③日本の学界で主流に合流できず、いつまで経っても観客扱いされるのを嫌って学会活動から遠ざかっていかざるを得ない者が増えている。こうしたハンディをいかに乗り越えていくかが今後の大きな課題であろう。

2. 日本の中国研究

日本の中国研究は歴史が長く研究蓄積も厚いが、中国では、日本語論文の読める専門家が少なく、社会科学系の日本語雑誌のほとんどがSSCI または SCI の対象になっていないこともあり、業績評価の際、日本語論文が不利であることは広く知られている事実である。

とはいえ、日本の中国研究に対する関係者の評価は決して低くない。彼らにいわせれば、米国型の経済学や社会学の研究では、理論モデルを使い様々な統計データを解析し、一流の英字ジャーナルに論文を発表したりすることができても、中国社会の底流に対する理解は必ずしも十分ではない。むしろ、日本型の詳細な現地調査に基づいた事例研究、しかも一見してバラバラに行われた各地域、各分野の事例研究が本当は組織的に実施され、それらの積み重ねにより中国社会の深層が真に把握されている、という。日本型の中国研究こそが警戒されるべきだという見方が根強くある。

満鉄が戦前中国で実施した農村調査はさておき、改革開放以降の日本人研究者による中国調査に対する中国側の評価に厳しいものがある。データ収集はするものの、研究成果の中国へのフィードバックがほとんどなく、日本社会への客観的な発信を行い日本国民の中国理解を深めようとする努力も少ないという。

日中両国の政治・外交関係が悪化する近年においては、日本人の中国調査に対するカウンターパートの戸惑いが感じられる。研究資金が乏しく海外出張も難しい時代には、外国との共同

研究のメリットが大きかった。しかし、いまは状況が大きく変わっている。10年前と同じ科
研費の予算をもって共同研究の話しを持ちかけても、潤沢な研究費を持つ今の彼らはあまり関
心を見せてくれない。その金額は感覚的に以前の数分の一に目減りしたからだけではない。学
術研究をするつもりでも、あるいはそれが故に、不都合な真実が究明されることを危惧して国
外との共同研究を避けようとする者も多い。

日本の中国研究に対する中国側の誤解あるいは理解不足があることは否めない。他方、日本
における中国研究のガラパゴス化、すなわち、中国研究を仕事とする膨大な専門家集団があり、
日本語を中心に研究成果を発表し、互いにそれを消化し進化し続ける現状に改善すべき点もあ
るのではないか。英語、中国語による研究成果の発表はいうまでもなく重要だが、中国研究の
専門家として日本社会に向け、中国の実情を積極的に発信する努力もすべきだろう。週刊誌や
テレビであら捜し式の中国報道が目立ち、「实事求是」の姿勢で中国のことを解説する真の専
門家が少ない。それが原因で、一般市民の対中理解が偏り両国関係がおかしくなっている側面
がある。私自身は、日本では中国のいいこと、中国では日本のいいこと、を意識的に伝えるよ
うに努力している。学者は、マスメディアの大衆迎合的な報道に加わる必要はなく、歪められ
た中国像または日本像を少しでも本来の姿に還元するように心掛けなければならないと思っ
ているからである。

何のための中国研究か。中国研究のあるべき姿とはなにか。中国研究者の果たすべき役割が
あるのか。日々、日中関係の推移を見ながらこう自問しているが、確固たる答えは見付かって
いない。日本在住の中国人研究者の宿命だろうか。

■第 65 回全国学術大会のご案内

会員各位

戦後 70 周年を迎える今年、安保法制をめぐって日本の政治が大きな転換点を迎えるかどう
かの瀬戸際にありますが、それだけでなく日本の首相談話の発表、中国の抗日戦争勝利記念式
典など日中関係に大きく関わる重要な行事が多く控えています。昨今、一時期に比べれば、日
中両国間の緊張関係が少し和らいだかに見えますが、しかし相互不信がなくなったわけではな
く、また互いへの理解が深まったわけでもありません。過日お知らせしたように、今年度の大
会共通論題を「日本の中国研究を問う」と設定したのも、こうした現状を意識してのことです。

今大会の共通論題では、政治、経済、社会、文学、歴史、対外関係など各分野の第一人者を
迎え、日本における中国研究のあり方、日中相互理解の促進に果たすべき我々の役割などにつ
いて学術的に議論します。初日の午後をすべて共通論題に充てますので、ぜひ積極的に参加し
発言して頂きますようよろしくお願い申し上げます。その他にも、魅力的な分科会が多く用意
されております。あわせて秋の京都の美も味わっていただければ幸いです。皆さまのご参集を
お待ちしております。

記

日時：2015 年 10 月 24 日（土）12 時より受付開始、25 日（日）9 時より受付開始

会場：同志社大学 今出川キャンパス 志高館

〒602-0898 京都市上京区烏丸通上立売上ル

参加費：1000 円（資料代）

懇親会費：一般 5000 円、学生 4000 円

*大会の詳細につきましては別送のプログラムおよび学会ホームページを御覧ください。

<http://www.genchugakkai.com/20150727taikaiannai.pdf>

同志社大学大会実行委員会：阿部範之、内田尚孝、加藤千洋、巖善平、竹内理樺、横井和彦
お問い合わせ先：

〒602-0898 京都市上京区烏丸通上立売上ル

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科巖研究室気付

Eメール：genchu2015[アットマーク]gmail.com

*送信時に[アットマーク]を半角記号へ置き換えてください

■全国理事会開催のお知らせ

下記の要領で全国理事会を開催いたします。理事の方はご参集ください。

日時：10月24日（土）10時30分～

場所：志高館1階 会議室

■連載 在外研究記 第2回

「ハーバード・イェンチン研究所での海外研修」 大澤肇（中部大学）

筆者は、2014年8月より翌年5月まで、ハーバード・イェンチン研究所（以下「イェンチン」と省略する）に客員研究員（Visiting Scholar）として留学した。私にとって、37歳にして初めての西洋での滞在であった。

なぜイェンチンに留学することになったのか。話は2011年に遡る。当時、NIHU 現代中国地域研究のPD研究員として東洋文庫に勤務していた筆者は、任期の最終年度を迎えていた。しかし就職活動がうまくいかず、海外のPDにも応募し、イェンチンに何とか採用されたのである。しかし、幸運は重なるもので、NIHUの任期切れ1ヶ月前という時期になって、現在の勤務先から専任職で内定を得た。そのためイェンチンへ辞退を申し入れたが、驚くべきことに彼らは「(私の訪米を)2~3年先送りにもできるから、勤務先にサバティカルを得られるよう、交渉してみなさい」と言ってきたのである。日本の大学や研究機関は、こういう場合に官僚的な対応を取りがちであるが、こうした柔軟な対応に、アメリカのスーパーパワーの源流を見た気がする（ちなみに同時期に内定を得た台湾のPDについても、辞退を申し入れたところ台湾側から任期の先送りが提案された）。

筆者の専門は現代中国の教育史であり、研究を進めるという点では、イェンチンはあまり適切ではなかった。民国史や現代史のスタッフは少ないうえに要職にあって多忙であり、AASなどの動向も含めて言えば、M・エリオットを筆頭とする「新清史」の勢いがあるように感じられた。とはいえ二度と無い機会であるので、様々な授業を聴講してみた。その結果分かったことは、史料の読み方・授業の進め方はそれほど日本と変わらないということであった。ちなみに、中国史のM・スズーニのクラスには、習近平の娘が登録していたらしい。彼の専門は明清時代の福建であり、そこで習近平と何らかの関係があったのかもしれない。いうまでもなく、

こうした中国関係のクラスには、私費はもちろんのこと、中国から公費で来ている訪問研究者が大勢聴講していることも少なくなかった。こうして米中間の人的交流が盛んになる一方で、サバティカルの期間短縮や、そもそも取ることに難しくなっている日本の研究者の現状を考えてみると、非常に暗澹たる気持ちにならざるを得なかった。

また滞在しているうちに、イェンチンが私を採用した理由の一部がわかってきたような気がした。どうやら私の研究テーマや経歴が、彼らの興味と合致したようである。一つは、中国の教育問題で、これはアメリカの大学にとって現在進行形の問題であることである。多くの中国人学生がアメリカに留学しているのと同時に、現在、中国に欧米の大学の分校がいくつもできているからである。またE・ペリーやW・カービーといった、ハーバードの中国研究者たちが、中国の教育問題についての講演や論文執筆を行っていた。彼・彼女らの専門ではないのであるが、中国の教育はホットな分野ということなのであろうか。もう一つはアメリカの中国（史）研究においては、データサイエンスとの融合が盛んということである。これは宋代史の大家であるP・ボルの貢献が大きい。筆者は東洋文庫で電子図書館の構築を行っていた経験もあり、この点が評価されたのかもしれない。実際に体験し、非常に興味深かったこの問題については、別稿を準備中である。

なお同時期にボストン郊外のブランダイス大学に留学されていた木村公一朗氏（アジア経済研究所）が、アメリカの中国経済・地域研究の現状について纏まったレポートを発表されているので、興味のある方はそちらも参照されたい。

(http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Download/Overseas_report/1411_kimura.html)

■事務報告

□2015-16年第2回常任理事会議事録

日時：2015年7月19日(日)15時から18時

場所：同志社大学今出川キャンパス 志高館1階会議室

出席者：川島真理事長、田中仁副理事長、加茂具樹事務局長、阿古智子会計担当理事、趙宏偉関東部会代表、北川秀樹関西部会代表、大澤武司西日本部会代表、菊池一隆東海部会代表、山本真編集委員長、王雪萍広報委員長、高見澤磨規約・財務健全化委員会座長、巖善平開催校代表（2015年）

欠席者：孫安石開催校代表（2014年）

【報告事項】

1. 会務報告

加茂事務局長より、会員数について報告があった。2015年7月15日現在で、個人会員は734名。団体会員は5団体。この間の新規入会は13名、再入会・復会者が1名、退会者が8名。

2. 会計報告

1) 会費納入率等報告（会計）

加茂事務局長より、会費納入状況について報告があった。7月15日現在、734名の会員のう

ち、未納なしが 526 名、未納 1 年が 105 名、2 年が 50 名、3 年が 38 名、4 年が 15 名。

2) 中間決算 (会計)

阿古会計担当理事より、中間決算についての報告があった。会費収入は予算近くまで到達する見込み。支出は会誌印刷会社を変更したことにより学会誌作成費は変化する見込み。その他(事務経費、郵送料等)はほぼ予算内の見通し。

3. 編集委員会報告

山本編集委員長より報告があった。

1) 『現代中国』編集状況

山本編集長より、『現代中国』89 号目次案に基づいて報告があった。投稿論文が 16 本あった。査読の結果、4 本を論文として、1 本をノートとして掲載することになったこと、大会特集論文が 3 本、これにたいするコメントが 2 本、書評が 6 本となった。9 月末の発行を目指して編集がすすめられているとの報告があった。

2) 編集作業にかかる問題点・改善点

山本編集長より、論文審査体制についての問題提起があった。編集委員会は投稿論文の専門分野の分布について事前に予想がつかないため、編集委員会の構成は現状に則して柔軟に対応したいとの提案があった。具体的には編集委員の増員の提案であった。理事会はこれを審議し、了承した。また、本年度から会誌印刷業者が変更になったことから、業者と協力をしながらより良い編集作業の環境を形成してゆきたいとの発言があった。

4. 広報委員会報告

1) 王広報委員長より、学会 HP、ニューズレター等の発行状況をふくめて活動状況の報告があった。

2) 王広報委員長より、学会ホームページに関するデータを管理するサーバー会社との契約(サーバー管理費等の支払い)の状況についての報告があった。学会ドメイン管理費として、15000 円/年間が請求される可能性があるため、今後、同費用を予算として計上する必要があるとの説明があった。

3) 王広報委員長より、学会 HP にある「学会会員 web-site」の管理および「学会会員掲示板」の運用方法についての問題提起があった。

5. 地域部会報告

1) 趙関東部会代表より、5 月 9 日(土)に東京大学で関東部会 2015 年春期修士論文報告会が開催されたとの報告があった。指導教員(会員)・部会理事の推薦を受けた報告者は 5 名であった。参加者は 30 数名であった。また理事会もあわせて開催し、常任理事会の内容、部会経費等について報告がなされた。理事会での審議事項は、会員承認、研究会の開催内容であった。2018 年度全国大会の開催校については現在調整中であるとの報告があった。

2) 北川関西部会代表より、6 月 6 日(土)に龍谷大学ともいき荘にて 2015 年度関西部会大会が開催されたとの報告があった。同大会では、午前中の分科会で「宗教・環境」、「政治・日中

関係」、「社会・教育」、「文学・芸術」が設けられて合計 11 の報告があったこと、午後には「2015 年の中国」と題される共通論題シンポジウムが設けられたことが報告された。また同日昼休みの時間にあわせて理事会が開催されたことの報告もあった。

3) 大澤西日本部会代表より、福岡大学で 6 月 20 日(土)に西日本部会研究集会が開催されたとの報告があった。同集会では、5 つの報告がおこなわれ、出席者は 20 名であった。また、4 月 18 日(土)に第 1 回部会理事会(福岡大学)が、6 月 20 日(土)に第 2 回部会理事会と西日本部会総会が福岡大学で開催されたとの報告があった。なお 3 月 25 日に西日本部会が共催で日中学術研究集会「清末民国初期の来日中国人留学生と中国現代文学日中学術研究集会」を開催したとの報告があった。

4) 菊池東海部会代表より、7 月 11 日(土)に愛知大学にて第 5 回研究集会の開催があり、3 名の研究報告をおこなったとの報告があった。また地域部会の特長を生かした、かつ地域を跨ぐ研究会の開催のあり方について問題提起があった。

6. その他 特に報告はなかった。

【審議事項】

8. 新入会の承認

合計 10 名の新規の承認案件が提案提出され、承認した。

9. 2015 年全国大会について

厳開催校代表(2015 年)より、2015 年 10 月 24 日(土)と 25 日(日)に同志社大学にて開催を予定している 2015 年全国大会の準備状況についての報告があった。会場の準備および共通論題、各分科会について承認された。出店する書店に対して適切な時期に連絡をおこない、取りまとめを幹事書店に依頼することを確認した。また常任理事会は、はじめて出店を希望している通信社については、団体会員として入会するよう依頼することを確認した。

10. 学会会計業務にかかる証憑類の保存期間について

川島理事長、阿古会計担当理事より学会会計業務にかかる証憑類の保存期間についての問題提起があった。審議の結果、常任理事会は 10 年間の保存をおこなうことを確認した。

11. 学会誌編集作業にかかる投稿された論文の紙媒体の保存期間について

学会事務局から、防災管理強化の観点から、投稿された論文の紙媒体の保存期間についての問題提起があった。審議の結果、常任理事会は、投稿された論文については電子媒体も存在することから、紙媒体の保存期間は 1 年とすることを確認した。

11. 学会 HP の管理について

王広報担当理事より、学会 HP にある「学会会員 web-site」の管理および「学会会員掲示板」の運用方法についての問題提起があった。

1) 学会 HP にある「学会会員 web-site」に多数のリンク切れがあることから、この管理運用

方法について問題提起があり、常任理事会は、これを審議した。この審議を踏まえて、10月の全国大会で開催される総会にて常任理事会より新たな管理運用の方針を提案し、審議に因ることを確認した。

2) HP 管理担当会員の業務量の簡素化の観点から、学会 HP にある「学会会員掲示板」の運用方法を修正する必要があるとの問題提起があり、常任理事会は、これを審議した。審議の結果、HP に掲載する情報の要件を再度明確化し、学会会員に周知することを確認した。

1 1. 『現代中国』編集関連の業務等について

山本編集委員長より、以下の問題提起があった。

1) 論文審査体制についての問題提起があった。編集委員会は投稿論文の専門分野の分布について事前に予想がつかなかったため、現状に則して、編集委員会委員を増やしたいとの提案があった。常任理事会は、これを審議し、了承した。

2) 編集記録の保存についての問題提起があった。常任理事会は、不採用分を含む全投稿論文、投稿・審査結果の一覧のデータを学会事務局に保存を依頼することを確認した。

3) 本年度から会誌印刷業者（凱風社）が変更になったことから、業者と協力をしながらより良い編集作業の環境を形成してゆきたいとの指摘があった。（以下、事務局長追記）。本年度の『学会誌』の納品および会員への配送方法については以下のとおりとなった。

①『学会誌』印刷後、印刷業者（凱風社）から学会事務局（生協学会サポートセンター）が委託している発送代行業者に送付する。

②特集論文の抜き刷りは印刷業者（凱風社）から特集論文執筆者に送付する。その他論文の抜き刷りについても印刷業者（凱風社）論文執筆者に送付する。

1 2. その他 総会および次回理事会を10月に同志社大学にて開催することを確認した。

以上

■地方部会報告

□2015年度関西西部会大会

[2015年度日本現代中国学会関西西部会大会要旨]

1. 日 時 2014年6月6日(土) 9:30-17:40

2. 場 所 龍谷大学ともいき荘

3. 参加者 80名

4. 自由論題

【宗教・環境分科会】

司会：松村嘉久(阪南大学)

・第一報告：寇鑫（龍谷大学・研究員）「中国西北部乾燥地域における農業用水の再配分に関する考察—水利権と水資源の有効利用を中心に」

現在の中国における水資源管理と再配分メカニズム、農業水利政策の新動向を確認したあと、西北部乾燥地域における農業用水の水利権調整の具体的な状況が整理・分析された。

・第二報告：ボヤント（桐蔭横浜大学・研究生）「内モンゴル東部地域における宗教変遷の

実態—ホルチン左翼後旗を実例として」

内モンゴルの宗教の状況について、中華人民共和国建国前、建国後それぞれの状況が整理された。その上で、政府の政策によりどのように人々の信仰が変容したのかを、ホルチン左翼後旗を例として具体的に分析された。

・第三報告：磯部美里（名古屋大学・学術研究員）「上座仏教社会における宗教実践の変化とジェンダー—西双版纳・タイ族を事例として」

上座仏教では女性の出家が認められていないものの、タイやミャンマーでは出家者に準じた女性修行者が見られる。一方西双版纳・タイ族では複雑な状況を呈する。詳細な事例を通して男性中心、女性が周縁化される、という構図とは異なるジェンダーの様相を浮き彫りにした。

【政治・日中関係分科会】

司会：辻 美代（流通科学大学）

・第一報告：林 礼釗（大阪大学・院）「儲安平の「民主」思想—1949年の政治的選択を中心に」

ジャーナリスト儲安平が1949年に中共を政治的選択した際の儲の「経済民主」思想を丹念に報告された。会場からは、分析ツールとする自由と平等は対立軸なのか、また、一ジャーナリスト儲安平を取り上げる学術的意味などについて質問が出された。

・第二報告：根岸 智代（京都外国語大学・非）「第6回太平洋問題調査会議の日中討論に関するメディア言説」

日本が自国の立場を発言した最後の国際会議である第6回太平洋問題調査会議について、外国メディア報道の分析を通じて会議の詳細が報告された。会場からは、会議での発言等々についての議事録の有無などについて質問が出された。

・第三報告：易 星星（兵庫県立大学・院）「中国旅行社の国際戦略と華人ネットワーク（1937-1954年）」

1920年の設立からアメリカに拠点を移し本国での営業を終了する54年までの中国旅行社の経営戦略が報告された。会場からは、南洋からの物資輸送は援蒋ルートではないのか、また、軍部との関係などについても質問が出された。

【社会・教育分科会】

司会：日野みどり（愛知大学・客員研究員）

・第一報告：安 □□（奈良女子大学・院）「中国における医療化された妊娠・出産—産む女性を対象として」

先行研究に欠ける「女性の立場から」の実態研究。出産の現場で進む医療介入、産後養生の商業化と都市・農村間差異が報告され、国際比較を可能にする相対的視点の必要性、産婦の選好の形成要因、医療介入と産婦の苦痛の関連などが議論された。

・第二報告：魏 禕（同志社大学・院）・巖 善平（同志社大学）「中国の大都市における教育発展と教育の達成メカニズム—天津市民調査に基づく計量分析」

天津市の個票データを用いて教育達成の決定要因を分析した報告。学校教育の拡大、教育格差の縮小、家庭環境の影響などが示され、研究の設計基盤となる教育観、「学歴教育」効果に

対する評価、データ解釈の当否などが議論された。

【文学・芸術分科会】

司会：瀬戸宏（摂南大学）

・第一報告：小野純子（名古屋市立大学・院）「台湾映画『 KANO～1931 海の向こう甲子園～』に見る台湾軍事動員」

1931年嘉義農林学校野球部が甲子園に出場し準優勝するまでを描き評判になった2014年台湾映画「KANO」が、漢人・原住民・日本人の「三民族混成」を描いていることに注目し、映画の語り、嘉義大学の語り、日本人の語りの各方面からその内容を調査分析した。

・第二報告：森平崇文（神戸学院大学）「戯劇節と戦後内戦期の上海文化」

第二次大戦終結直後に上海で開催された「戯劇節」を検討し、戦時中の戯劇節と継承関係にあること、年毎に国民党の関与が強まること、上海の各劇種、芸能が参加していること、地方劇にとっては自己の認知度を高め他の劇種との交流をおこなうよい機会であることなどが明らかにされた。

・第三報告：城山拓也（立命館大学）「葉浅予「王先生別伝」をめぐる考察」

中国漫画史で確固たる地位を築いている葉浅予の1930年代連載漫画「王先生」から「王先生別伝」を取り上げて、「王先生」シリーズの隆盛の社会的意味について内容、登場人物、掲載紙「図画晨報」の各方面から考察した。葉浅予が漫画の独自性模索をも追求していたことが指摘された。

5. 共通論題・シンポジウム

「2015年の中国」

司会・趣旨説明：田中仁（大阪大学）

報告：

〈歴史〉川井悟（プール学院大学）

竹内実、西村成雄の研究を例に挙げながら、歴史的先行事象からどのように現在・未来を捉えられるのか、という大きな枠組に基づいた刺激的な報告であった。

〈経済〉中川涼司（立命館大学）

「戦後70年」「21世紀の15年」「習政権の3年」という三つのタイムスパンから、現代中国経済を読み解こうとする試みであり、同時に現代中国経済をめぐる幾つかの論争点についても紹介された。これも広い視野に立った報告であった。

〈政治〉三宅康之（関西学院大学）

習近平政権が、毛沢東、鄧小平と並ぶ指導者たらんと意識しつつ、増大した国内矛盾を抱えながらも、高まった国力を背景に国内外の秩序再編を主導しようとしている、ということについて、新常态、国際秩序、中央地方関係をキーワードにして論じられた。

〈映画〉張新民（大阪市立大学）

急速に発展する中国の映画産業。その中で大きな注目を浴びているのがインターネット世代映画である。本報告はそのインターネット世代映画が生まれた背景、そしてそれが引き起こした論争について丁寧に紹介するものであった。

以上の報告の後、質疑応答、討論が行われた。時間の制約もあったが、それぞれの報告に対して、さまざまな質問が寄せられ、熱い議論が展開された。

□2015 年度西日本部会研究集会

2015 年 6 月 20 日（土）、西日本部会は福岡大学七隈キャンパス文系センター棟にて定例の研究集会を開催した。経済や文化人類学、文学などの幅広い分野において、院生から「大御所」に至るまで熱の入った報告ならびに質疑応答が行われた。参加者は 20 名程度であったが、北京大学中文系で現代中国文学を研究されている商金林教授（下関市立大学にて在外研究中）が参加され、さらに研究集会後には懇親会も開かれ、西日本部会の所属会員が交流を深める貴重な機会となった。

今回の研究集会では計 5 本の報告が行われた。各報告のテーマならびに概要、質疑応答における議論を以下、簡単に紹介したい。

①劉鵬会員（福岡大学大学院）「中国の MF における社会関係資本の役割」は、中国の農村地域における MF（マイクロファイナンス）の現状と可能性について整理・論じた報告であった。いわゆる MF は 1970 年代に始まったグラミン銀行を嚆矢として、貧困地域における貧困解消を目指す小口融資の枠組みとして知られるが、報告者は現代中国における MF を「NGO（理念追求型）」と「商業志向型」に分類し、その利点と欠点を指摘したうえで、究極的には、貧困解消という明確な理念を基本としつつ、商業化され、ある程度の規模を持つ MF 機構の出現が必要であると論じた。質疑応答においては、報告者自身による事例調査・研究の必要などが議論された。

②尾崎孝宏会員（鹿児島大学）「内モンゴル牧畜地域における政策と牧畜戦略—四子王旗の事例より」は、内モンゴル自治区ウランチャブ市四子王旗を事例として、改革開放以降における牧地の実質的私有化の進展を背景とする牧畜政策（禁牧ならびに草畜平衡）の展開と牧畜民世帯の牧畜戦略の変遷を論じた報告であった。質疑応答では、内モンゴルにおける「土地収用」の実態や特定の大規模牧地所有者への牧地の集中などについて議論が行われ、同地域における経済格差の拡大や軍と「土地収用」の関係などにも言及があった。

③下野寿子会員（北九州市立大学）「中国からみた日中韓 FTA の意義と交渉」は、中国が FTA を周辺外交の重要課題として強く認識しつつも、これを性急に進める必要には迫られていないと論ずる一方で、三国間における実務協議が拡大・継続されることで、東アジアの不安定要因（対日関係）を取り除くことができ、あるいはアメリカを牽制することができるとし、時間はかかるが、積極的に推進していこうと論じた。フロアからは習近平政権の「一帯一路」構想や AIIB 設立の動きとの関連などについて質問があり、中国の経済外交に関する活発な議論が行われた。

④松岡純子会員（長崎県立大学）「『霊与肉』（1980）から『牧馬人』（1982）へ—その改編について」は、張賢亮著「霊与肉」を原作とする謝晋監督の映画「牧馬人」が、審査規制の枠のもとで、人物や場面の設定変更、言及される思想家・書籍・雑誌の変更、エピソードの付加、などによる改編を相当程度施したうえで公開版の完成にこぎつけたとし、規制の枠内において、監督者がその原作の意図するところをいかなる改編をもって伝えようとしたのかに考察を加

えた。質疑応答では、特に「改編」を加えた謝晋の評価をめぐって活発な議論が行われた。

⑤岩佐昌暲会員（九州大学名誉教授）「馮至「緑衣人」を読む—その改作をめぐって」は、抒情詩人・馮至が郵便配達人を題材にして作ったその処女作「緑衣人」（1921年作）について、その原テキストと改作され1980年に発表された『馮至詩選』収録の修正版テキストを比較しつつ、その改編の意図と意義を分析し、原テキストと修正版はまったく別の作品として評価すべきこと、さらに詩人としての馮至についても、1949年を画期としてその断絶があり、それぞれの時期の作品を区別して扱うべきだと論じた。質疑応答では、詩人から政治家へと立場を変えていく馮至の「転向」について、また、中国当代文学を研究する際に踏まえるべき政治的変動などをめぐって活発な議論が行われた。

なお、第1報告から第3報告までは大澤武司会員が、第4報告ならびに第5報告は新谷秀明会員がそれぞれ司会を担当した。報告終了後、部会総会ならびに懇親会が行われ、交流を深めることができた。[記：大澤武司会員]

□東海部会第5回研究集会

東海部会は、第5回研究集会を2015年7月11日（土）に愛知大学車道校舎で開催した。参加者は20名で、活発且つ積極的な議論がなされた。報告の要旨は以下の通りである。

1. 何憶鶴（名古屋大学大学院）「村上春樹を中国で翻訳すること—翻訳者林少華の思惑を越えて」／司会：工藤貴正（愛知県立大学）
2. 野口武（愛知大学東亜同文書院大学記念センター）「日清貿易研究所にとっての『実業』」／司会：三好章（愛知大学）
3. 村上享二（愛知大学大学院）「第二回A・A会議と第二回非同盟首脳会議開催をめぐる中国とアフリカの関係」／司会：砂山幸雄（愛知大学）

報告（1）は、中国における村上春樹受容に多大な影響を与えている翻訳者・林少華の村上像に考察を加えた。林少華の村上作品翻訳には、清き田園（自然）と穢れた都市（人口）を意識する、中国の工業化による「田園喪失」としての「郷愁」と、社会や政治における不条理の解決を知識人の「良知」に求める意識が強く投影するため、中国の読者は徒々林が作り出した村上像を受け入れるに過ぎないとする論を報告した。

報告（2）は、日清貿易研究所における「実務」重視の機能を解明するため、『対支回顧録』等の基礎的史料から、出身者を整理・集計し、入学までの社会的移動傾向、および進路先の職業動向について検討を加えたものである。従来、1890年から1893年6月まで上海に設立された日本人学校である日清貿易研究所の研究は、漢口楽善堂—日清貿易研究所—東亜同文書院へと経緯するという理解のもと、楽善堂の「探偵」活動の延長にある「軍事的謀略機関」と見做され、その後は、政治史や貿易実態の分析から「ビジネス学校」として見直されたが、資料的な根拠をもとに詳細な検討がなされていないとする観点から報告した。

報告（3）は、1960年代前半の中国は、国際的な孤立化から脱するため、アジア・アフリカにおける影響力強化を目指していたが、中国のアフリカでの影響力強化が順調に進んでいなかったことを、中国が開催を目指した「第二回A・A会議」と中国と対立するインドが開催を目指した「第二回非同盟首脳会議」という二つの大きな国際会議への準備過程と中国の様々な活動と関与を確認し、「第二回非同盟首脳会議」は開催され、「第二回A・A会議」は開催されな

ったという事実に基づいて検討したことを報告した。

■日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

呉敬璉『中国経済改革への道』NTT出版、2015.3

馬場毅編『多角的視点から見た日中戦争』集広社、2015.5

何彦旻『中国の資源税』京都大学学術出版会、2015.3

京都大学地域研究総合情報センター『地域研究』（第15巻第1号）昭和堂、2015.4

人間文化研究機構現代中国区域研究プロジェクト『当代日本中国研究』社会科学文献出版社、2015.3

垣内景子『朱子学入門』ミネルヴァ書房、2015.8

高橋伸夫編著『現代中国政治研究ハンドブック』慶應義塾大学出版会、2015.7

川越敏孝『回想一戦中・戦後の日中を生きて』岩波ブックセンター、2015.6

=====

日本現代中国学会事務局

〒166-8532 東京都杉並区和田3-30-22

大学生協学会支援センター内 日本現代中国学会事務局

TEL:03-5307-1175

FAX:03-5307-1196

genchu@univcoop.or.jp 郵便振替:東京 00190-6-155984

広報委員長:王雪萍(東洋大学)

ニューズレター編集:菅原慶乃(関西大学)

日本現代中国学会HP: <http://www.genchugakkai.com>

=====